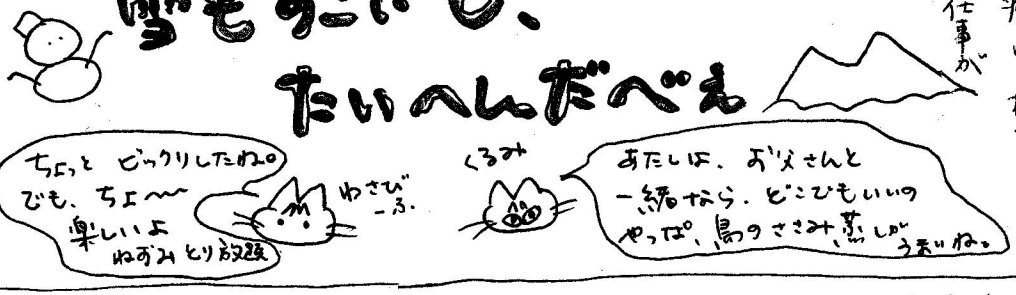
# なんで　裏磐梯に？

## 雪もすごいし、たいへんだべえ

ある日、母に「自給自足」したいので、どこかに広くて安い土地はないかって聞いたところ、なぜか連れてこられたのが裏磐梯でした。それが2006年くらい。そこで、小栗さんに会い、「パーマカルチャーをやりたい」と言ったら、「まずは借りてやってみたら」とアドバイスされ、それから、アロマやハーブの仕事も兼ねての裏磐梯通いが始まりました。でもさー、冬長いし、自給ムリでしょと思った。しかし、この美しい自然と、都会から来る人々が癒される様を見るにつけ、「これって、私の仕事が楽にできるってことだ」と思い、やっぱり移住を考えるようになった。自分達だけでがんばって自給するんじゃなくて、地域の人々とつながりや、地域の資源を生かし、皆で楽しく暮らす地域づくりをしている人の話も聞いたりしているうちに、自然も美しい裏磐梯で、そういうこと、できないかなと思い、できるかもと思い、決意した時に、出会ったのが、この家です。その時も、小栗さんが縁をつないでくれました。しかし、実は、夢の中に磐梯山が出て来てないか、呼ばれたかも、と思ったのが一番のきっかけでした。めでたしめでたし。




## パーマカルチャーって何ですか？

パーマカルチャー　かるちゃー

例えば、薪ストーブ。里山から間伐した木を燃料として、出た灰は、山菜のアク抜きに使ったり畑にまくと肥料になります。里山もお手入れされればきのこや山菜や花々もよく育つし、クマが人里に来ることも防げるし、今はストーブあたたまり、昔はそれで料理だってするのがあたり前でした。

それで、自然と共生するムダのない暮らしが出きていた。日本でもどこでも、その風土に合った暮らしを皆でしていたわけです。それがいつしか崩れていって、今、自然界も人間界も秩序がなくなりつつあるのが現代。その風土に合った暮らしを生かした暮らしをとり戻し、未来にも続く暮らしをしていくための諸々を、オーストラリアのビル・モリソンという、魔師・猟師のおじさんが大陸に入り直し、体系化したのがパーマカルチャーです。

だから、昔の暮らしに戻るのもなく、今の石油だのみの暮らしを続けるのもなく、どうやって持続可能な生活や社会をつくるかということなのです。

自分達の暮らしがパーマカルチャー的かというと、まだ自信持てないけど、一年間、ここで暮らして思うのは、「生きるための力を少しづつ取り戻している」ということですかね。もし、停電になったり、石油が高騰したり、災害があって物資が届かなくなっても、しばらくは暮らして行けると思う。それは、大きなシステムに頼り切らずに生きる基本は自分でやる方法を少しづつとり戻しているから。そして、ここで暮らす人達の中にはそれができる人がたくさんいるということが、とても心強いと思うからです。

## 相模湖でなぜか ごえもん風ろづくり

トランジション相模湖

「うちのボイラーがこわれたんだけど修理に何万もかかるし、でも外をみたら、こんなに形の木いっぱいあるのに使えないと思ったらくやしくなってさ」と、私達がお手伝いに行ってた農家のSさんが言いました。なぜか、そこから、五衛門風呂構想がわきあがりました。でも、どうやって材料手に入れるんだろう？と思っていたら、「うちの場置きに昔使えたのがあるよ」とか、大谷石があるとか、いろんな板をもったおじさま達が登場するのです。そこで、その名も「ちーむゴエモン」。時々、みんなで持ちよりお食事会する？という流れになり、定例会も始まる。「日程は、才00曜とか言われてもわかんないから、満月とか、そういうかんじで決めないって」という人がいて、そうすることに。思えば2009年の3月ごろからですかね。定期的に集まっては、皆で、ごはんをもちより、自分達のやりたいこと話し合ったり。これまでに、地元のおばちゃんに教えてもらう「こんにゃくづくり」「酒まんじゅうづくり」「染色」などなど。

メンバーの一人、退職を期に、地域づくりに尽力している丁さんが、地元の津久井大豆栽培をはじめ、農業新聞にとりあげられたり。地大豆復活はちーむゴエモンの年間行事にもなりました。もちろん味噌づくりも恒例行事。今では、休耕地を使って田んぼ、小学校の行事によばれて大豆脱こくをしたり、つながりや活動がどんどん広がり、都心部や他の地域で同じような活動をする人とのネットワークも広がって楽しそうです。行政主導じゃなくて市民主導の底力は違うなぁ、ということを実感。今年も大豆いただきました。